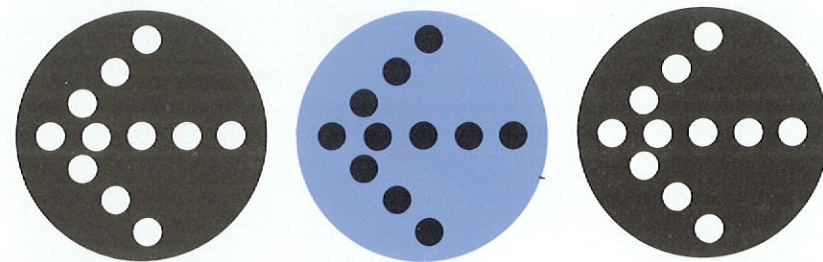


「農業が好き」 生産者が、消費者が、育て楽しむ農業に

今年4月から牛肉・オレンジの輸入自由化が始まりました。農業も今や、国際競争の時代を迎えています。一方消費者ニーズはますます多様化し、農業を巡る課題と期待はより大きなものになっています。

そこで、今回の知事対談では、県内で農業に従事し、それぞれの分野で活躍されている専門農家の方3人にお集まり頂きました。福島知事を囲んで、農業の国際化、後継者問題などをざっくばらんに語りあって頂くこと一時間。以下は、その一部をまとめたものです。



宮本 植木町の宮本です。ミカンと柿のハウスをやっております。私が小学校六年の時父がフィリピンで戦死して、中学校を卒業するのを待ちうけて農業を始めました。ずい分苦労しましたが、今考えるとその時の苦労がプラスになっていると思います。

石原 三加和町の兼業農家から嫁いでまいりました。青年団活動で知り合った主人との結婚には両親とも大反対でした。休みがないからとか、全然したくないからと心配して。それでも嫁いだからには両親を安心させられるような農業をしたいと頑張ってきました。肥育牛は大変なんですけれど、二五〇頭飼っています。

知事 すこいねえ。石原 いえいえ。生まれて一週間から十日の赤ちゃん牛を買ってきて、ミルクを飲ませ、つまり保育から始めて肥育牛まで育て出荷しております。月十頭ずつの導入、出荷計画でやっております。

木之内 出身は東京です。小さい頃から動物が好きでとにかく農業をやりたいと、親の大反対を押しきって始めました。親は今も東京でサラリーマンをしています。

九州東海大学農学部に入っすぐ

「農業クラブ」を創りました。村内に土地を八反ほど借り、学生何人かと家を借り、農業をやりながら学校へ通いました。

大学三年の時、外国の農業を見てみたいというのが、自分を試したいという気持ちで南米へ行ってきました。経済が不安定な国でやっているのを見て、日本ほど幸せな所で農業ができないはずがないと確信しました。それと、経済大国日本というけれど、食糧の安定性を持たないという意味ではむしろ、危険性を持った。砂上の楼閣。じゃないかと強く感じました。それで、何ができるか分からなければ日本で農業をやってみよう。

知事

どうもありがとうございます。私は、石原さんの「毎日農業記録賞」受賞作品を全部読みましたが、おもしろく、ほほえましかったのは「ご主人の牛を選ぶ目はまちがいないんだ」と事実たくさん女性のなかから自分を嫁さんを選んでことで、それが実証されると。妙子さんが牛みたいになっちゃって。(笑い)

いやいやこれは、なかなか大変なものですよ。楽しく拝見しました。それから、宮本さんが「熊本の果樹」という雑誌に書かれたものを拝見しましたが、あなたあの写真と全然違うのねえ。あの写真は何年前のなんですか。(笑い)その後、ご苦労されたんですね。

一同 (笑い)

石原 妙子氏

- ・三加和町出身、菊水町在住。34歳
- ・畜産経営(肥育)約250頭
- ・夫婦でか牛のメス肥育に挑戦。多額の負債を抱えながら、徹底した経営管理と節約により経営再建に成功。この間の経緯をまとめた「我が家の肥育経営」が平成2年度毎日農業記録賞優良賞を受賞



木之内 均氏

- ・東京都町田市出身、長陽村在住。29歳
- ・経営耕地面積450a(借入地)
- ・九州東海大学農学部卒業後、学生時代に貯めた40万円を手持ちに就農。収入はすべて機械類に投資、生活費は夜間アルバイト等で賄う。その努力が実り、経営も順調に拡大。村の園芸部会長を務めるなど地元にも溶け込む。
- ・平成2年度農林水産大臣賞及び県農業コンクール新人王部門優秀賞受賞



宮本 裕氏

- ・植木町出身、在住。54歳
- ・経営耕地面積約400a
- ・ミカンの周年供給体制づくりに取り組み、所得向上、労力軽減を図る。県果樹研究会会長として指導的役割を果たす。
- ・昭和62年農林水産大臣賞及び県農業コンクール自立経営部門優秀賞受賞

